



倉本聰
コレクション
13

浮浪雲 (2)

scénario
1978

倉本聰



倉本聰
コレクション
13



理論社

KURAMOTO SOH COLLECTION 13

浮浪雲 (2)

1983年12月 第2刷

著 者／倉本聰^{くらもとそう}◎

発 行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話 (03)203-5791

振替 東京9-95736

1983 Printed in Japan／0393-91613-8924

誠和印刷／島田製本

倉本聰作品

ジョージ・秋山原作より

浮浪雲
(2)

テレビ朝日
石原プロモーション 制作
昭和53年6月4日～9月3日放送

装画・題字

装幀

小野州一

杉浦範茂

ぬ の章

雲の家・縁側

うたいつつ遊んでいる浮浪雲と新之助。

廊下を雑巾がけしているかめ、女。

雲・新之助「へもしもしかめよ かめさんよ（ジャンケン）

世界のうちで おまえほど（ジャンケン）

歩みののろいものはない（ジャンケン）

新之助、歌をやめ、雲の耳に何か耳うちする。

愉しそうにうなずき合い、またうたいだす二人。

雲・新之助「へもしもしかめよ かめさんよ

世界のうちで おまえほど

お尻のでかいものはない

どうしてそんなにでかいのか」

バケツの水をぶっかけられて、とび上がる二人。

桃色の画面

タイプ、カタカタと文字を打ち出す。

「このドラマはフィクションであり、時代考証その他、かなり大幅にでたらめです」

タイトル流れて。

*

縁側

障子の貼りかえをしているかめの所に欲次郎。

欲次郎「頭は」

かめ「あ、ちよつとすみません、今取込み中」

欲次郎「何か」

かめ「いえね、今新之助をお説教していただいてるんです」

欲次郎「頭が説教。へえめずらしい」

かめ「ほんとにもう近頃悪くて悪くて、わたしの手には負

えないんですよ」

欲次郎「ハア」

かめ「たまにはガツーンと父親らしいとこを一発見せてい

ただきませんとね」

新之助の部屋

雲「なにもそんなにきつくいわなくなつていいでしょうが」

新之助「きつくいわなきやききめがないでしようが」

雲「だけどあちきは」

新之助「明け方こそそそ帰つてきたの、こっちはちゃんと

見てるんだよ」

雲「いや」

新之助「そんなことでいいと思つてるの」

雲「ですから」

新之助「ここンとこ毎晩じゃん」

雲「ですからあれはね」

新之助「男は弁解するもんじゃないって、いつかいったの

誰でしたっけね」

雲「うん」

新之助「人に説教する前に、自分がちゃんとしなさいよ」

雲「ハイ」

新之助「だいたい僕はいつも思うンだけど、父上にはどう

いうか——ハリがないのがダメなのね」

雲「ハリ」

新之助「生きてるハリ」

雲「うーむ」

新之助「ないでしょ？」

雲「うーむ」

新之助「だから生き方に迫力がないし、したがって息子に

説教しようとしても説得力に欠けちゃうわけよ」

雲「そうなんですよ」

新之助「わかるでしよ、僕のいつてること」

雲「ハイ」

新之助「だからアレですよ、ここらで父上も人生に對する

ハリをつくれば？」

雲「たとえはどういうことですか」

新之助「それは何だつていいンじゃない？」

雲「たとえは」

新之助「たとえは、だからさア、——こう、何か身を入れ

てできる仕事をつくるとか」

雲「仕事」

新之助「自分のことを小説にしてみたら？」

雲「あちきが小説書くンですか」

新之助「小説つてよりも、まアいわば自伝ね」

雲「女のことしか書けませんよ」

新之助「いいじゃないそれでも」

雲「思い出すだけだつて大変ですよ」

新之助「やつてみることもよ、考えてる間に。そうすると人生にハリができるから」

廊下

かめがしずしずとお茶を運んでくる。どこかでのどかなチリ紙交換の声。

寢室

机に向つて奮闘している雲。

かめ「(入つて) 大変でございますね」

雲「自伝を書いているんです」

かめ「新之助にききました。作家になるなしてしびれちゃう」

雲「――」

かめ「何でございますか? それ」

雲「いや、これまでかかわりのあつた女をね、とにかく書き出してみようと思つたら、これがイヤすごい数なんです」

かめ「見して」

かめ、巻き紙を手にとつて見る。

雲「今で六百を超えてますから、ヒョツとすると千くらい

いくかもしれませんよ」

かめ「おときさん書きました?」

雲「ア、まだでした」

雲、書き加える。

かめ「おきぬさんは?」

雲「ア、それ書きました」

かめ「おさよさんは?」

雲「おさよさんて」

かめ「ホラ、提燈屋の」

雲「――」

間。

雲「あんたどうしてそのこと知つてんです」

かめ「(笑う) 妻ですものオ。――ア、それから清元のお師

匠の。ホラ、ホラ、ホラ、ホラ」

雲「あんたのほうがよく知つてますよ。あんた代わりに書

いてくださいな」

かめ「(変に照れて) そんなア、あたしイ。女流作家なして

え――」

音楽――軽快なりズムでイン。B・G。

道

陽炎かげろうの中を、向うからやつてくる熊と定八さだはちのかこ。

エ、ホ、エ、ホ。

品川屋・表（道）

かこ着く。

熊「旦那。着きましたよ」

かこから下りる一人の町人——御家人くずれ小田作之進。

金を渡す。

熊「ア、いやこんな」

定八「どうもすみません」

小田、行きかけて、フツとふり返る。

小田「ああ」

二人「へ？」

小田「品川に夢屋って問屋場があるかね？」

熊「夢屋ならうちで」

小田「——」

熊「何か」

小田「かめ女って人は今でもそこにいなさるか」

定八「それアうちの頭の奥さまでさ」

熊「旦那、奥さまをご存じなンで」

小田「いや、ずっと以前にな」

定八「何かアノ、お伝えしておきますか？」

小田「いや、別にいい。ただ聞いたまでだ（中へ去る）」

定八「へ」

熊「どうも、毎度ッ」

音楽——碎ける。

居間

茶をいれるかめの前に熊と定八。

かめ「私を知ってた？」

熊「へい」

かめ「誰だろう」

熊「ずっと以前についておっしゃってましたが」

かめ「町人で？」

熊「へい」

定八「いや、でもあれはもしかしたら、お武家上がりかも

しれやせんね」

熊「そうそう」

かめ「どんな感じの人？」

熊「としのころは、そうすね、頭なンかと同じくらい」

定八「なかなかキリッとした二枚目で」

かめ「誰でしょう。(お茶を出す)あの頃いっぱいいたんですよね。私のこと目当てに通ってきてたのが」

二人「へい」

かめ「さア誰だろう。五郎君かな。ひろみかな。利明かな

それとも、ア、研二かな？」

雲の声「(パチリ)全く平和なもんですねえ」

縁側

将棋をさしている雲と新之助。

新之助「(ニタニタ)ほんとうにそんなにモテたんではないか」

雲「(眉に指先で唾つける)これじゃねえですか？」

新之助「(眉に掌で唾つける)コレですね」

雲「だいたい人間、過去をなつかしむようになっちゃしまいです」

新之助「そう、現在に生きなきゃね(パチリ)王手」

雲「オッ？」

新之助「でも、母上が今もてたらどうする」

雲「——(駒の動きを考えている)」

新之助「好きな男ができちゃったりしてさ」

定八「頭お邪魔しました(去る)」

熊「お邪魔しました(去る)」

雲「ハイ」

雲、パチリと打つ。

新之助「ねえ、もし母上が浮気なシカしたらさ」

雲「そりゃあもちろんお祝いしますよ」

新之助「ククッ。またツツパツて。アッ。ズルしたッ！」

雲「しませんよ」

新之助「したこれ。絶対。こっちにあったんだ」

かめ「ねえ」

雲「ハイ？」

かめ「私も自伝書いてみようかと思うんですけど」

雲、おどろいたフリして盤上をめちやくちやにこわしてしまふ。

新之助「アアッ!!」

雲「やつぱり男性へんれきのですか？」

かめ「もちろん」

雲「フーム」

かめ「どうかしら」

間。

雲「ショートショートにしかならねえンじゃねえですか？」

効果音——チョーンと柵きの音。

洪沢の庵

洪沢「ほう。自伝をねえ」

雲「ハイ」

洪沢「そりやあ是非とも読みたいですなア」

雲「ところが筆なシて持ったことがねえンで、書こうにも

書き方がわからない」

洪沢「誰かに話して書かせりやいいでしょう」

雲「書いてくれる人、いますでしょうか」

洪沢「そりやあんた近頃の作家なシてもンは、ネタがなく

て毎日困っているンじゃ。話してやったらとびついて

きます」

雲「ほう」

洪沢「わしも若い頃はそれで稼ぎました」

雲「ほう」

洪沢「井原西鶴の好色一代男」

雲「ハイ」

洪沢「あの主人公の世之介というのは——（声ひそめる）

じつは私がモデルです」

雲「ハハア——！」

洪沢「あいつ人のことさんざん書きよってモデル代全然払

うてくれンのじゃ」

効果音——チョーンと柵きの音。

雨

バラバラと降ってくる。

道

人々の足、雨をさけて走る。

瓦

しのつくような夕立ちになる。

軒下

雨をさけてとび込んだかめ。

同じく二人の職人ふう。

職人1「いやア、ひでえなア」

職人2「こりやちよつとすぐにはあがりそうもねえぜ」

職人1「どうする」

職人2「走るか」

職人1「そのほうがよさそうだな」

職人2「よしッ」

二人とも、雨の中へバツと走り出て行く。

かめ。

——当惑したように空を見ている。

かめの後ろにもう一人の雨宿り。

漣然たる雨。

声「(小さく)かめどの——」

かめ、ふり返る。

例の町人——小田作之進立っている。

かめ——ききちがいかと顔をもどしかけ、急にギクン

ともう一度見る。

小田。

かめ。

かめ「(口の中で)作之進さま——」

雨の音。

小田「しばらく」

轟然たる雨の音。

かめ「いつ——。こちらへ」

小田「昨日」

かめ「——どちらから」

小田「——」

雨。
間。

小田「変りませんな」

かめ「——作之進さまも」

小田「(ちよつと笑う)私は変った。ごらんのとおり。今は

町人です」

雨。

かめ「今はアノ、——何を——」

小田「——」

かめ「やっぱり、——あの頃の——」

小田。

——目をそらすようにちよつと笑う。

雨の音。

小田「かめ殿は、見たところおしあわせそうな」

かめ「そうですようか」

小田「ちがいますか？」

かめ「——さア」

小田「——(じつと見る)」

雨の音。

かめ「あの、今、どちらに」

小田「品川屋です」

かめ「いつまでこちらに」
小田「さア、後二、三日」

雨の音。

小田、——フツと笑う。

かめ「は？」

小田「いや。あの時も、ちょうど雨でしたな」

雨

走る足。

自身番

ズブ濡れになってとび込む春秋。

中で立ちあがる同心岡田とその配下。

春秋「いったい何事が」

岡田「昨夜江戸麻布善福寺の公使館付近で、フランス人通

詞が何者かに襲われた」

春秋「エ？」

音楽——鈍い衝撃でイン。不安定に低いB・G。

岡田「下手人は三名、品川方面へ逃走したと思われる。各宿をあらため、並びに検問を設けて、怪しい浪人は全て通報すること」

春秋「へ」

岡田「与力の水谷様もまもなく来られる」

春秋「へいッ!!」

雨の中

早馬の足音がすさまじく走る。

泥水をはねてつつ走る春秋と下つ引たち。

音楽——急激に盛りあがって碎ける。

雲の家

夕焼け。

軒

雨だれ。

その縁側に

かめがぼんやりと帰ってくる。

間。

誰もいない室内。

どこかでのどかな豆腐屋のチャルメラ。

かめ。

——しばらくぼんやり立っている。

寢室

かめ、ゆつくりと入ってくる。

間。

雲の書いた女の連名。

かめ。

——のろのろとそれを手にとる。

かめの顔。

間。

その顔に、

小田の声「あの時もちょうど雨でしたな」

かめの顔。

かめの声「作之進様！」

いきなりたたきつける雨の音。

回想

雨の音。

ずぶぬれになって立っている若き日の小田作之進。

その目からボロボロこぼれている涙。

傘さして走り寄る、若き日のかめ。

かめ「いったい——何が」

小田「幕府は——ついに——調印した」

かめ「調印——」

小田「ペリーに脅かされて、和親条約に」

かめ「——！」

小田「俺たちの運動は——。徒労に終わった」

かめ。

かめ「(口の中で) 小田様——」

雨の音。

小田の下宿

雨の影を写す小部屋の中で、抱合っている小田とかめ。

音楽——西田佐知子の「アカシアの雨」イン。B・G。

雨の音、ゆつくりと遠ざかっていって、「アカシアの雨」のみ、以下のシーンに残る。

縁側

夕陽がさしている。

玄関

「ただ今！」と新之助が帰ってくる。

台所

夕食の仕度をしているかめ。

居間

食事するかめと新之助。

新之助は朗らかに、今日の出来事を話しているが、かめにはその声がかきこえていない。

夜

かめの部屋

布団の上にポツンと坐っているかめ。

ずっとつづいている「アカシアの雨」

かめ。

かめの声「切迫した声でしのびこむ」どうして!」

回想

下宿。

旅仕度する小田作之進。

必死にすがっている若き日のかめ。

かめ「どうしてそんなこというの!」

小田（仕度）

かめ「私ついてきます!」

小田（仕度）

かめ「家なんか捨てます!」

小田（仕度）

かめ「あなたが外国に命を捧げるなら、私はあなたに命を捧げたいの! つれてって!」

小田（立つ）

かめ「ねえお願いです、つれてってください!!」

小田。

——— すぐるかめを、静かにふりほどく。

小田「かめ殿。おちついてききなさい」

かめ「———」

小田「私はあんたをしあわせにできない」

かめ「イヤイヤするように首をふる」

小田「私は、亭主には向いてない」

かめ（懸命に首をふる）

西田佐知子、圧倒的に盛りあがる。

寝室